

ダニエルズ歴史班 B

碑文から見える土司刀心亭

西川和孝（中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻）

キーワード：思茅・漢化・土司

調査期間・場所：2003 年 11 月 23 日～12 月 23 日 中国雲南省思茅地区

The Local Native Ruler Dao Xinting as seen through a Tomb Inscription

Kazutaka Nishikawa (graduate course of literature Doctoral student in Chuo University)

Keywords : Simao、Sinification、Local native ruler

Research Period and Site :24.Nov.2003~22.Dec.2003, Simao city ,Yunnan province, China.

要旨：本報告では、昨年の調査で得た刀心亭墓の史料に、地方史の史料をつき合わせ、こうした作業を通して、この地域における土司の実態解明の一助とすることを記している。

1. 六順土司刀心亭墓について

六順土司刀心亭墓は、今の思茅市南屏郷整碗老董寨に現存している。墓碑に見られる史料によると、刀心亭は、若くして漢文教育を受け、土司に任命され、光緒 23 年（1897）に死去した。この墓に関する記載は、『思茅風物志』等であり、思茅市文物保護単位にも指定されている【黄桂枢 2000：78－79】。ただし、その記述は、簡単な紹介に止まっており、碑文の内容や写真の掲載などはされていない。

六順土司刀心亭墓は、山腹の密林の中に存在したため、地元の村長の協力を得て調査を行なわざるを得なかった。また、墓が存在する場所には、水道等はないので、湿拓用の水（十リットル）を携帯し、その他の機材を調査員で分担し、山の麓から現地まで徒歩で移動した。途中、案内人が、墓の位置を確認する事が出来ず、立ち往生するような事もあり、到着まで約 2 時間を要した。

六順土司刀心亭墓は、4 ページの写真にあるように、墓面の高さが約 2 メートル、長さ約 4 メートル、幅 3 メートルの比較的大きなものであった。刀心亭墓の前には、思茅市文物保護単位のコンクリート製の標識があったが、すでに倒れていた。また、この墓の調査中に、地元運転手の協力により、刀心亭の一族のものと思われる三基の墓を「発見」することが出来た。その内の二基は、すでに墓碑部分が外れ、地面に転がっていた。地元の人が抱くと、野象が破壊したという事であるが、はっきりした事は分らない。

刀心亭墓は、地元の村長でさえも、すでにその場所を確認するのは、容易ならざる事であり、保存状況は、荒れるに任せるといった状態であった。昨年末の調査で、こうした刀心亭墓の拓本を採る事ができたのは、非常に意義のあることである。その上で、新たに「発見」した三基の墓は、管見の限りでは、どこにもその記載が見えず、この調査の大きな収穫と言える。

2. 思茅の歴史背景

思茅の歴史は、18 世紀前半の清朝勢力の進入を境とし、大きく二つに分類する事が出来る。前半は、シプソンパンナー王国の影響下にあり、後半は、中国王朝の進出により、その支配下に徐々に組み込まれて行くのである。

シプソンパンナー王国は、ムン（盆地ごとに形成されていたタイ族の自律的政治単位）連合国家であり、ツェンフン（現在の西双版纳ダイ族自治州景洪市）がその中心となるムンであった。シプソンパンナー王国は、14 世紀終わり頃からその勢力を拡大し始め、1403 年に威遠（景谷）までその勢力をのぼそうとした。しかし、こ

の計画は、明朝の圧力によって挫折した。この時点で、シブソンパンナー王国の影響力は、思茅地区の普洱にまで達しており、少なくとも 14 世紀の初めには、思茅はシブソンパンナー王国の影響下に入っていたことが窺われる。これ以後、シブソンパンナー王国は、相対的に安定した時代が続いたが、16 世紀後半になり、事態が一変する。ビルマのタウンゲー朝が進出してきたのである。シブソンパンナー王国は、以後、ビルマの影響を強く受ける事となるのである。一方、中国王朝の圧力は、清成立以後に強まっていくのである。

18 世紀前半の清朝の進出について説明する前に、中国王朝とシブソンパンナー王国の接触について簡単に記述しておく。中国王朝とシブソンパンナー王国の接触が確認されるのは、元王朝時代の 1292 年であり、1296 年に徹里軍民総官府がたてられた。明王朝は、それを継続し、1384 年に車里軍民宣慰使司と改名した。そして、清朝も車里軍民宣慰使司と称した【加藤 2000：26－44】。

雍正帝期になると、清王朝は、シブソンパンナー王国の支配地域に勢力を伸ばし始めた。雍正帝は、満州旗人鄂爾泰を雲貴総督に任命し、大規模に改土歸流を実施させた。この背景には、シブソンパンナー王国の山地の治安強化という目的があった【ダニエルス 2004：96－97】。その結果、1728 年以後、メコン川東岸に清朝勢力が入り、1729 年には、現在の思茅地区普洱市に普洱府が設置された。車里宣慰使刀氏は、十七世紀半ばに清朝に帰順し、宣慰使の職を継承していたが、清朝の進出により、刀氏の管轄地域は瀾滄江西岸に限定されることとなった【加藤 1999：103】。こうして、思茅は、清朝の影響下へ徐々に移行し始めるのである。

3. 清代における漢民族の移住の背景

次に西南中国への大規模な移民が起こった背景について言及しておかなければならない。

清代、中国では、急激な人口増加が起った。一八世紀の百年間に中国の人口は、一億数千万から約三億へとほぼ倍増し、その人口増加は、是以後も引き続き起こったのである。この人口増加の背景には、十六世紀から十七世紀にかけてアメリカ大陸から導入されたサツマイモ・ジャガイモ・トウモロコシなどの新作物があつた。これらの新作物は瘠せた土地や山地でも栽培が可能であり、従来は、森林のまま放置されるか、あるいは少数民族の焼畑農耕が行なわれていた地域に人々が進出することとなった【濱島 1999：466－467】。こうして多くの人々が江西・湖南・湖北・四川などの山地に移住して行った。雲南は、山地が大部分を占め、しかも雍正帝によって大規模な改土歸流が行われていた。そのため、多くの移民を受け入れる条件が整っていた。こうして一八世紀半ば以降、漢族の雲南への大量移民が開始された【石島 2002：12】。

雲南山地に漢族の移民が本格的に進出したのは、主として乾隆年間以後である。その大部分は、兵士と生活の糧を求めて内地からやって来た民衆だった。清の緑営制によって、多くの兵士が僻遠の山地にて防衛の任に当たり、年をとって退役しても、現地にとどまり、故郷には帰らなかった。彼らは、内地からきた民衆とともに村を作り、山地の開発を進めた【方国瑜 1987：1228－1229】。

このような人々のほかに、鉱山開発や商品作物の栽培等とも絡み、多くの商人（江西・湖南・広東・四川などの各省）が雲南省に進出して行った【曹樹基 1997：170】

以上の様に、漢族の進出が清朝以後、特に乾隆期以後、大規模に展開されて行ったのである。このように、漢族の移住の背景には、改土歸流、中国大陸の人口増加、緑営制の駐屯地の設置、そして、商人の進出などの様々な要因が存在したのである。

4. 刀心亭墓を使った研究

刀心亭の先祖である刀国輔は、雍正帝期に起った反乱の平定に功があつたため、土把総を授けられた【龔蔭 1985：190－191】。雍正帝期に、清王朝が、シブソンパンナー王国の支配地域に勢力を伸ばし始めた頃、普洱や思茅などで清朝に反抗する戦いが起るが、結局、清朝により、武力で押さえ込まれる事となった。その戦いの際に、清朝側に協力したという理由で、いくつかのムンの首長に土司の職を与えられたのである【加藤 2000：26－44】。刀心亭の先祖もこのような首長の一人であつたと考えられる。

六順土司刀心亭墓の研究の意義としては、第一に、『新纂雲南通志』には、刀心亭の名が見えており、地方志

の史料とつき合わせる事ができ、その上、墓表に書かれた文字史料を使うことで、地方志の記述を補う事が出来る。こうした作業を通して、土司であった刀心亭という人物の具体的な像を浮かび上がらせる事が出来るのではないだろうか。

第二に、写真からも判断できる様に、墓の形式において非常に漢族の影響を受けていると見られる。これは、他の三基の墓についても共通している事である。これは、当時、既に漢族の影響が非常に強かった事を示唆しており、この地域の漢化の度合いを知る上でも一助となるであろう。



六順土司刀心亭墓

【文献】

日本語（五十音順）

石島紀之 2002「中国雲南省における少数民族の文化変容」『東アジアにおける異文化接触と文化・言語・コミュニケーションの受容・変容に関する基礎的研究』

加藤久美子 2000『盆地世界の国家論—雲南、シブソンパンナーのタイ族史』京都大学学術出版会

1999「シブソンパンナーの歴史」『アジア遊学』9

クリスチャン・ダニエルズ 2004「雍正七年清朝によるシブソンパンナー王国の直轄地化について—タイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察」『東洋史研究』62—4 94—128

濱島敦俊 1999「漢民族の拡大—清代前期の社会と経済」『世界歴史大系 中国史4—明—清—』松丸道夫等編 山川出版社

中国語（ピンイン順）

曹樹基 1997『中国移民史』第6巻 福建人民出版社

方国瑜 1987『中国西南歴史地理考釈』下冊 中華書局

黄桂枢編著 2000『新編思茅風物志』雲南人民出版社

龔蔭 1985『明清雲南土司通纂』雲南民族出版社

Summary: This report points out the importance of collating tomb of Dao Xinting with other source, in order to clarify the actual conditions of the local native ruler.